

グローバル通信

Ryukoku University

GLOCAL TSUSHIN

2022.12vol.60

これからの議会改革と龍谷大学との連携	1
「ひとはひとりでは立ち直れない」更生保護からの少女支援	1
修士論文中間報告会の感想	2
国内・海外フィールド調査報告	3
第1回地域リーダーシップ研究講演会感想	4
第1・2回先進的地域政策研究講演会感想	4
協定先懇談会報告	4
事務局インフォメーション	4

大学院の第2学期が始まってから3か月経ち、行く年を惜しみつつ、来る年が待ち遠しい年の暮れになりました。皆さまいかがおすごしでしょうか。

さて、今回のグローバル通信60号では、夏に開かれた修士論文中間報告会の様子をはじめ、国内・海外フィールド調査の報告、地域リーダーシップ研究・先進的地域政策研究の講演会の様子などを掲載しています。

修士論文を提出を間近に控え、何かと慌ただしい時期になりました。コロナ禍でもございますので、くれぐれもお体にご留意のうえ、よい年をお迎えください。



これからの議会改革と 龍谷大学との連携

伴 孝昭

(大津市議会議長・滋賀県市議会議長会会長)

大津市議会は、これまで、「市民に開かれた分かりやすい議会」を目指して、様々な議会改革に取り組んでまいりました。目下、取り組んでおりますのは、広報広聴における改革であります。

これまでの議会広報といえば、市議会における議論の結果を周知することに主眼を置いておりましたが、大津市議会では、議会の広報広聴は、「広聴あってこそその広報」との認識に立ち、令和4年3月に市議会の広報広聴機能の充実に向けた戦略的な方針となる「大津市議会広報広聴ビジョン」を、また同年4月にはビジョンで定めた広報広聴戦略に基づく取り組みを5年間で計画的に推進するための「アクションプラン」を策定し、各種取り組みを推進しています。

具体的には、まずは、おおつ市議会だより、市議会ホームページ等の広報媒体のリニューアルとともに「市民スピーチ制度」の構築による広報広聴活動の推進等に取り組んでいく予定であります。

翻って、大津市議会と龍谷大学とは、平成23年11月にパートナーシップ協定を締結して以降、大学図書館の活用、政策の立案、検討における研究者による助言、指導等を受ける一方で、大学からはインターンを議会として受け入れる等様々な場面で連携してまいりました。

議会改革の推進には、プランの策定や軌道修正等において、専門的な助言、指導を賜ることが不可欠であり、貴学との連携はなくてはならないものであります。

また、現在、地域公共人材総合研究プログラムにより、本市議会から若く、意欲のある議員が1名、龍谷大学において学んでおります。

龍谷大学における専門の教員の指導及び学友からの刺激を受けながら進める研究の中で知識、経験、人脈等を培うことにより、大津市議会における議論を深め、ひいては大津市の発展につなげてくれることを強く期待しているところであります。

大津市議会は、市民のためこれからもより一層精進してまいりますので、貴学には今後とも引き続き良きパートナーとして、大津市議会を御支援いただければと存じます。

「ひとはひとりでは立ち直れない」 更生保護からの少女支援

齋藤 常子

(一般社団法人京都わかさねっと代表理事)



生きづらさを抱える少女たちを支援するために、作家の瀬戸内寂聴さんや村木厚子さんが呼びかけ人となって設立した「若草プロジェクト」に共感して、2016年から活動を始めました。「すべての少女が自分らしく心豊かに生きられる社会」の実現のために、少女の居場所づくりや寄り添い支援などの活動をしています。

社会構造の変化、繋がりの希薄化が若者の「生きづらさ」を増幅しています。特に若年女性は、一人親家庭や非正規雇用などの貧困の連鎖に陥りやすく、DV被害にさらされやすいため、親身に寄り添い支援するサポートが必要不可欠です。コロナウイルス感染症の流行で、性虐待や性搾取の増加、長年にわたる男女の不平等に基づく女性の困窮の顕在化が言われており、その結果、若年女性の自殺リスクはさらに高まり、DV被害者の自殺リスクは約4.5倍に増加しました。

また10代の少女たちは「こども」と「おとな」の狭間で、行政の制度や支援の手が及ばないことも多く、社会の中で孤立しがちな現状があります。その結果、本音を言える場所がSNS等に移行し、それらが犯罪や性的搾取の巣窟になっているといわれています。

わたしたちは、更生保護を活動の柱としており、貴大学の矯正・保護総合センターには、日頃から貴重な学びをいただいています。地域公共人材総合研究プログラムを通して、専門的な知識と問題解決能力を高め、少女の孤立という社会課題に対して真摯に取り組むことで、犯罪のない地域をつくり、社会で活躍する生き生きとした女性の輩出、さらには、自分を思いやり、他人を思いやり、まちを思いやる心を醸成し、地域力へと繋がることを願っています。

修士論文中間報告会の感想

龍谷大学政策学研究科・法学研究科では毎年7月に修士論文の途中経過を報告する「修士論文中間報告会」を行います。

政策学研究科から2名、法学研究科から1名の方に、報告会の感想を頂きました。

中 昭彦（政策学研究科修士課程2年）

私が修士1年として政策学研究科に入学した時は、再生可能エネルギー、特に小水力発電に関する政策について学びたいと漠然と考えていました。それ以上研究テーマが絞り切れていなかったのが正直なところです。昨年度は1年間で修士課程を履修する他の社会人院生に刺激を受け、また受講した講義内容や先行研究などを見ながら研究テーマを考える1年でした。

こうした時期を経て7月の中間報告会で私の論文の題目としたのが「中山間地域の地元組織による農業水利を活用した小水力発電の事業促進施策に関する考察」というものです。ここでは先生方から、「水力発電の適地でも限界集落となっている場合など地元組織に事業主体とすることを前提条件として矛盾が生じないか」「事例調査でどうしてそこを対象にしたのかその理由が不明確で、研究成果の一般化が可能かわからない」など研究の根本的な指摘を受け、あわせて参考文献の引用のしかたなど論文作成の作法についてなど限られた時間の中で大切なことを教えていただき、ありがたく感じています。

いただいた指摘事項を踏まえつつ、論文提出まで時間的に限られてきましたが日々着実に研究を進めてまいりたいと思います。



猪飼 隆介（政策学研究科修士課程1年）

私は、老朽化した公営住宅の建て替え事業の研究をしており、先進事例である大阪府大東市の「もりねきプロジェクト」を研究対象にしています。中間報告会に向けて、これまで漠然とした研究内容を具体的に書くことが非常に難しく苦戦をしました。中間報告会までに、担当教員の服部教授からは私自身がこれまで漠然とした課題や研究方法に対して真摯に話を聞いて下さり、研究目的や研究方法などを整理することができました。中間報告会での発表は、緊張はしましたが制限時間内に報告を終えたことに安堵したことを覚えています。また、報告後の質疑応答では先生方から様々な視点からのアドバイスを頂くことで、先行研究を調べる、私自身が明らかにしたい事を明確にする等、自身の研究を深めたいと思いました。これから修士論文の追い込みになります、中間報告会で先生方から頂いたアドバイスを活用して修士論文を完成させたいと思います。



北村 達也（法学研究科修士課程1年）

久しぶりの緊張!年甲斐もなく、本当に緊張して、指導担当である寺川先生の顔色ばかりが気になり、発表しながら、先生の顔をチラチラと見ていました。先生の顔が緩むと嬉しい気持ちになって、どんどんと自信を持って発表している自分がいて、先生が難しい顔をされると、先生の顔色、様子を見ながらゆっくりと発表している自分がいました。本当にこんなことを言うと恥ずかしい限りですが、小学生の授業参観の時に母親の顔ばかりが気になって、授業に全然身が入っていなかった、そんな頃の自分を思い出す、そんな感じでした。

発表自体は、100点満点中65点という自己評価です。何がマイナスだったのかというと、話しているスピードが早くなったり、遅くなったり、そして、自分が今この話を発表しているのかわからなくなってしまっていたことです。普段の授業の合間の休憩時間の会話などで、同期の皆さんの論文の進み具合が早く、本当に全員優秀な方ばかりで「1人取り残されてしまう、どうしよう」という焦りだけが、僕の心を締め付けてくれていますが、最後まで気を抜かず、頑張らせて頂こうと思っています。寺川先生を始め、ご指導いただける全ての先生方には、「感謝」しかありません。

国内 フィールド 調査報告

杉山 和則 (政策学研究科修士課程 2年)

南海トラフ地震の津波想定地域では、公共施設や住宅の移転などの対策が検討されています。修士論文では、産業面は移転を計画できるか、その際に配慮すべき課題について明らかにしたいと考えています。

8月下旬、既に浸水区域から公共施設等の移転を行っている和歌山県海南市と串本町を訪問し、担当職員の方に現状の取組実態と産業面の対策についてヒアリング調査を実施しました。

まず、市町村によって防潮堤の有無・地形の違いなど前提となる特徴が大きく異なること、産業面はまだ対策の検討を進めることができていることがわかりました。本調査の結果は修士論文に役に立っていますが、直接お話を聞いたことで現場にも貢献できる成果を出すという思いを新たにしました。

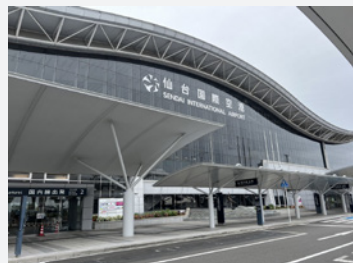


伊藤 悠希 (政策学研究科修士課程 1年)

国内フィールドワークでは、中森先生と学生4名(修士課程2名,博士課程2名)で岩手県花巻市へ行きました。それぞれの研究テーマと関連性が高い企業へ訪問し、経営に関するお話をお聞かせいただきました。

1日で数社の企業にお話をお聞きする機会は初めてでした。各企業の経営者は世代も業種も異なりますが、それぞれの理念のもとで、工夫を凝らしながら高い技術力を有していて、先行研究だけでは伝わらない生の声を聞くことができ、大変勉強になりました。

経営者にインタビューをさせていただき経験も緊張しましたが、とても良い経験だったと感じています。それらも踏まえて、自身の研究をより深めていきたいと思いました。



福島 麻斗 (政策学研究科修士課程 1年)

2022年度、国内フィールド調査で仙台市を訪問しました。沿岸部は東日本大震災の津波被害を受け、現在では災害危険区域に指定されており住宅の建築を制限されています。その風景から震災の爪痕が今もなお残っていることを痛感しました。そのような中で、荒浜小学校遺構を訪問しました。震災の記憶を後世へ伝えるために校舎は被害にあった当時のまま保存されており、校舎の中には、当時この学校に通学していた児童に加え、日本各地の訪問者たちの復興への熱いメッセージを目にしました。ここに、災害の惨禍に果敢に立ち向かおうとするに日本社会の強さを感じました。私は、災害とは無縁の生活を送ってきました。今回の体験を経て、そんな私ができることは何なのかを今一度考えてみたいのです。



海外 フィールド 調査報告

毛藤 洸大 (政策学研究科修士課程 2年)

海外フィールド研究ではオーストラリアのメルボルンを訪れました。

メルボルンの属するビクトリア州ではLXRPと呼ばれるプロジェクトが現在でも進行中で、線路を立体交差化することで同時に新しいオープンスペースの設置、パブリックアートの制作などにより、地域社会や通勤客に対して付加価値を提供し、前向きな地域の財産を残そうとしています。

一方で、沿線の一部地域では既存の樹木や歴史的に価値のある構造物を喪失しかねないとし、LXRPの計画見直しを求める運動が起こりました。鉄道施設の地域的な価値について研究する目的で、高架化後、保存の状況や主張が反映された部分などを高架化前に運動を起こした団体の調査の内容を基に現況を調査しました。



第1回地域リーダーシップ研究講演会感想

講師：前・全国知事会事務局次長、元・総務省 満田誉氏

テーマ：地方公共団体における危機対応 ～災害から財政危機まで～

門口 弘樹（政策学研究科修士課程1年）

危機への考え方として、「厄介な危機」は、目に見えるような問題ではなく、ゆっくり・じわり・長期的に日々の生活の中で少しずつ影響を及ぼしてくるため、対策が難しく最も危険と話されており、「確かに」と納得しました。現在の社会課題と言われているような問題についても、昨日今日に生まれた問題ではなく、少しずつ、じわじわと問題が進行してきたものだと感じます。そのような問題を如何にして早期に問題提起し、解決に向けた施策をとっていくかが重要だと感じました。

講義の全体を通して、リーダーとは、様々な意思の方向性を定める役割だと感じました。それらを踏まえ、改めてこれからの地域社会をより良いものにしていくためには、問題解決をリーダーに一任するのではなく、私たち一般市民が自分事として様々な物事について考え、意見し、自分たちで改善していくことが必要だと感じました。



第1・2回先進的地域政策研究講演会感想

講師：(株)梵まちづくり研究所代表取締役 吉田道郎氏

テーマ：まちづくりとプロセスデザイン ～自治力育成の考え方・手法・ツール～

高山 哲弥（政策学研究科修士課程1年）

先進的地域政策研究では、各地の優れた先進的地域政策を講演や事前・事後学習によって学ぶ講義です。第1回は梵まちづくり研究所の吉田氏のご講演をお聞きました。

長きにわたってまちづくり、特に地域のマネジメントや自治力を高める取り組みを行ってきたからこそ、実体験を踏まえた事例や取り組み詳細について学びました。

本講義では、事前学習として取り組み事例等を先に学び、講演の際にその詳細について思いや文献からは見ることができない考えを深く知ることができました。吉田氏には疑問点についてお聞きしたり、自身の考え、取り組みに対する示唆をいただき、非常に良い学びとなりました。



講師：新潟県長岡市副市長 高見真二氏

テーマ：長岡市のまちづくり 地方都市の課題と目指す姿

吉田 匠（政策学研究科修士課程1年）

第2回の先進地域政策研究では、新潟県長岡市の高見副市長のお話を聞きました。

高見副市長は芸術大学を卒業後、建設省に入庁し、建築物等でバリアフリー化を義務付けるハートビル法の企画に携わったり、UR都市機構で郊外地域の再生に取り組むなど様々なキャリアを歩まれた後、長岡市副市長として就任されました。

今回はその様々なキャリアで積まれた経験から見た長岡市の現状や課題をお聞きするだけでなく、これからは「まちづくり」だけでなく「まちをつかう」、「まちをつなぐ」視点が必要であるということをお聞きいただきました。また、私も長岡市と同じ地方都市出身であることもあり、地方都市ならではの課題解決の取り組み事例はとても興味深く、有意義な時間となりました。



協定先懇談会報告

2022年7月20日(水)、地域公共人材総合研究プログラム地域連携協定先懇談会を開催いたしました。今年度もオンラインにて開催させて頂き、名古屋など遠方の団体様からも含め29名の方々にご出席賜りました。

懇談会では、本学大学院の教育理念・目的、地域公共人材総合研究プログラムの概要や、プログラムに参加している2研究科(政策学研究科、法学研究科)の特長などについて説明いたしました。

後半の意見交換では、実際に本プログラムにて修士課程を修了された方の経験談や、研究指導體制に関すること、社会人の学びについてなど様々な意見をいただき、大変有意義な会となりました。

事務局インフォメーション

政策学研究科 修士論文・課題研究報告会
2023年3月11日(土)10:00～(予定)

7月9日(土)に開催した中間報告会には、多数の修了生の方々にご参加いただきました。ありがとうございました。3月の修士論文・課題研究報告会についても、深草キャンパスにて対面での開催を予定しております。ご都合がよろしければ、是非ご参加くださいませ。(詳細は3月上旬にメールでご案内予定です。)

地域公共人材総合研究プログラム ニュースレター 「グローバル通信」 通巻60号 2022年12月

発行 / 龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム H P / https://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/
連絡先/ 政策学部教務課 編集 / 吉田匠、吉川絢菜
TEL:075-645-2285 FAX:075-645-2101 編集補助 / 松尾修、鮫島広樹
監修 / グローカル通信編集委員会